

財団だより

多摩川

1996.9 第71号



アマガエル(アマガエル科)
緑色の小型のカエル。人家付近
にもみられるが、河原の低木や
草地に住む。場所によって体の
色が変わる。



7月27日実施された多摩川HYOGO愛Landフェスティバル(多摩川フィジー火渡りの儀式)

■多摩川現風景■

②7 多摩川週間'96

今年で第11回を迎えたこの行事もすっかり多摩川の夏の風物詩となってきました。

今年も「トトロといっしょに多摩川自然体験、ビデオ展」、「夏休み 多摩川教室」、「多摩川HYOGO愛Landフェスティバル」、「多摩川シンポジウム-多摩川の夏祭り」などなど流域の各所で盛大に行われました。

「夏休み 多摩川教室」などは、多摩川右岸の二子新地の川原で行われましたが、7月24日、25日の両日で、600名も参加して、たいへんな活況でした。まさになんでもありで、水生生物、生活排水、水質測定、ゴミ、エコマーク、ミニ水族館、河川浄化施設の見学などなどお父さん、お母さんも早めの夏休みを取って、こどもと一緒に楽しんで勉強しておられました。多摩川の川の水に足を浸してすっかりくつろいでおられました。

テントによしずを下げたいかにも涼しげな休憩コーナーもとてもうれしいものでした。

「多摩川HYOGO愛Landフェスティバル」とも奇妙なネーミングで、なにをやるのかとお

もってありましたところ、本邦初公開、ならぬ、アジア初公開のフィジーのサワウ族による「火渡りの儀式」、伝統的な歌と踊り「メケ」だそうで、純日本的、多摩川とのミスマッチが夏の夜の幻想を醸し出したのであります。写真でなにやら人体がうごめいているのがそれです。

・関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

- ① 多摩川を活用した環境教育の実態と展望
1986年 丸田頼一 財団環境情報科学センター (No.88)
〈一般研究〉
- ① 児童・生徒・地域住民による多摩川流域の状態と水質汚濁の調査-多摩川を探検しよう-
1979年 尾島俊夫 羽村市公民館 (No.6)
- ② 環境教育の場としての多摩川の教材化
-多摩川の水源地近くから中流域について-
1985年 濁川富雄 都立清瀬高校 (No.41)
- ③ 多摩川の底生動物の生態をもとにした環境教育プログラムの作成
1984年 橋上一彦 学芸大附属小金井中 (No.34)
- ④ 玉川上水系の用水流域住民の意識調査および水辺レクリエーションに関する調査
1988年 小坂克信 八王子市立第三小 (No.69)
- ⑤ 多摩川における青少年のあそびと環境教育の研究
-次世代の多摩川の守り手を育てる-
1996年 千葉勝吾 東京都立田園調布高 (研究中)

多摩川散歩

■ 浅川わくわくマップ ■

八王子ランドマーク研究会 鈴木 泰

浅川わくわくマップは1991年、(社)八王子青年会議所によって作られました。八王子の歴史や暮らしは浅川と深い関わりを持ってきましたが、八王子青年会議所も「浅川清掃デー」を初め、浅川についての行動や提言を幾度も行ってきました。25周年に当たって、当時の土屋隆委員長を初めとする政策開発委員会が浅川を軸にした市民の手作りの提案をつくるための具体的な方法について、当時のとうきゅう環境浄化財団専任研究員の山道さん、また八王子ランドマーク研究会などと一緒に考えたのが「浅川ワークショップ」でした。そして浅川流域で活動をしている市民が共同で提案をしていこうということになりました。参加したのは「八王子カワセミ会」「高尾・浅川の自然を守る会」「浅川地区環境を守る婦人の会」「多摩川漁業協同組合八王子支部」「日野・私たちの清流連絡会」「浅川勉強会」そして「八王子ランドマーク研究会」「(社)八王子青年会議所」という、様々な市民団体でした。また魚類学者の君塚芳輝さんなどの協力もいただきました。

まず現場体験を共有しよう、ということで日野市の百草から浅川を歩きました。生き物のいる環境、人が親しめる水辺の楽しさ、水は綺麗な方が

いい、そんな体験を重ねながら、わずか4か月で今の浅川の紹介をする「わくわく現マップ」と川を軸にしたまちづくりについての提案「わくわく夢マップ」の2枚の地図を作り、さらにそれぞれの市民団体の主張や活動などを盛り込んだ『浅川わくわくマップ』が出来上がったのです。

ワークショップのルール作りは人と人が言葉を交わすこと、現場での経験を共有することの大切さを教えてくれました。この事が参加した市民にとって後の「多摩らいふ21」「水郷水都全国会議多摩大会」などの活動に大いに役立つことになりました。

5年の間に流域の状況は変わっていますが、この地図に込められた主張はまだ十分な意味があると思っています。最後にこのマップの後記を引用して終りとします。

「未来の子供達が清流と緑あふれたまちを受け継ぐために、今に生きる私たちに一体何ができるのだろうか、そして何をしなければならないのだろうか。浅川に思いを巡らす人々が、平等の立場で互いに他の意見を尊重する場を作りたい。そんな思いを形として現したのが『浅川わくわくワークショップ』なのです。－中略－立場の違うもの同志がお互いを尊重しつつ、自分の思いを伝え合い、自由に話し合ってみる－中略－やがて、一つの方向が見えてきて、その思いを私たちは地図に映してみたいのです。」

残部は僅少です。問い合わせ先 国立市東4-13-9 鈴木泰 (tel 0425-76-5465)。無料です。



「浅川わくわくマップ」
(一部分)

1991年

(社)八王子青年会議所発行

私と多摩川



多摩川台公園より多摩川を見下ろす
(太田区土木課制作
多摩川台公園の案内パンフレットより)

東京都環境学習リーダー講座2期生

渡辺美砂

私は多摩川から1分もかからない所に住んでいる。もう20年たつが、川のそばに住んでいるということを強く自覚させられたのは、10数年前台風で多摩川が洪水になり私の家が床下浸水したことだ。地形的に私の所は低くなっているので、道路の水があふれ出してから腰ぐらいの高さに増水するのは一瞬のことだったのだ。当時、絶対にこれ以上水は増えないはず、おかしいという自分の気持ちと裏腹に庭の水面はみるみる増し、床下にゴボゴボと水が流れる音を感じて、慌てて近くの高台に住んでいる親戚に電話で連絡した。ところが子供2人と逃げようと玄関を出たとたん、その水は嘘のようにどンドン引いていったのだ。後から、それは水門を開けたからだということだった。急いで駆けつけてくれた親戚に、道路の水もすっかり無くなっていて、事の重大さを伝える術もなかった。多摩川と水門のしくみは詳しくは分からなかったが、近所の人は床上浸水した家もあり、人災だと言っていた。今、思えば水の恐さも知らず、確か町内の人小学校に避難するように呼びかけていたのに、様子を見ていたとは、私はずい

ぶんとのんびりしていたものだ。

私の住んでいる所から二子橋と丸子橋の間ぐらいにあり、多摩川の下流に位置する。その多摩川でも私が一番気に入っているのは、写真の多摩川台公園の見晴し台から見るほぼ丸子橋にさしかかるあたりの多摩川である。

川のゆったりとした曲線が一望に見下ろせて、自然の豊かさ、大きさを感じさせてくれる。恐い川であるが、美しい川でもある。私の近くにある“デイホームたまがわ”のお年寄りボランティアで遠足にその見晴し台に来たことがあった。足の弱いお年寄りも張り切ってやって来て、多摩川を眺めると、デイホームにいるより顔の表情がとても生き生きとしてきて、川は人に生きる活力さえ与えてくれるものかもしれないと思った。

今年5月25日に東京都環境学習リーダー講座2期生とその友人で“多摩川クリーンエイド”を行った。多摩川台公園から川の方に降りた所から区営のテニスコート付近までのゴミ拾いをした。17人で1時間ほどでゴミ袋(大)で16袋になった。中味は1位タバコのフィルター・2位プラスチック・ビニール系の食品や菓子の袋・3位飲料缶であった。

ゴミを拾いながら、気づいた事があった。この辺は丘が多く、緑が豊富だ。今年3月にやはりその2期生と“能ヶ谷の森”を見学しに行った。そこは見事な山桜の大樹などがあり、狸も住んでいる丘であるが、都市計画で年内には工事が始まり、やがて宅地になってしまうそうだ。同じ丘なのに…。多摩川台公園の丘には亀甲山古墳があり、その北側には8個の小円墳が連なっている。私の近くにも野毛大塚古墳・御岳山古墳がある。古墳が自然を壊さないようにしてくれたのだ。遠い祖先に感謝したいと思った。

私は老後に油絵を描く楽しみを残している。是非、この写真の多摩川を描きたい。今、私は世田谷区消費生活センターで環境問題の啓発活動をしているが、多摩川がいつまでも美しくある為に頑張りたい…。

よみがえ

甦れ！多摩川

■ 川口川を歩く ■

今回は、八王子市の、前号で紹介した谷地川の南を平行して流れる川口川を、河口から源流に向かって遡って歩いた。

川口川は延長14.09kmの一級河川である。水源は五日市町の南端、刈寄山である。河口は浅川に流入している。中野橋の上から川を望むと水が濁っており、流入してくる小川の口にはコイが群がっている。この辺は都内ワースト2クラスの水質といわれている。合流点付近の川原は月見草の咲いた草本の茂みが美しい風景となっている。国道16号線の川口川橋を過ぎると、川は典型的な直立コンクリートブロック積みの堤とフェンスにさえぎられた側道となって続く。高水敷には今が盛りとヒマワリが咲いている。水が真ん中の2米幅を流れ、4米幅ずつ両側が草本の茂みに覆われており、ある意味では多自然型河川のかたちにはなっている。後は人が近づけるようになればいい感じである。

咳守橋付近では川の水は澄んでいて、川底の石や砂利が透きとおって見えるほどである。山王橋を過ぎると水は濁ってくる。原屋敷橋にくると、今度はきれいになってくる。この繰り返しは、川に流入してくる排水の汚濁の度合いが影響しているためではないかと思われる。これからは綿密に汚濁源を調査し一つずつ改善して行く作業が川をきれいにするためには必要であると思う。

仲田橋を過ぎ、中央高速道をくぐると、間もなく清水橋につく。ここには清水公園があり、くぬぎなどの雑木林の、ゆったりとしたいい公園で、この昼下がりの猛烈な暑さを忘れさせる涼しい風が、木陰に吹いている。しばらく行くと、面白い標識があった。「東京湾まで50.4km、多摩川まで10.0km、浅川まで2.4km」と表示してある。なかなか、気がきいている。ほんのちょっとしたことであるが、こういうことは知りたいことである。

下犬目橋と佐貫橋の間には全く水が涸れてしまい、川原が乾き切って露呈しているところがあり、驚いた。川がこの部分では、寸断されているのである。陶鎔小学校付近でも川の水がかれて川底のところどころに水たまりが残っている。それでも、水を求めてか

小サギが飛んでいる。

明治橋、高尾橋、唐犬橋、駒形橋、この辺りに来ると、周囲も林や、畑があって田舎の風景が楽しめる。川の水も澄んでくる。山王橋になると、川ぞいの側道がなくなり川を迂回してまた川に会うという感じになる。

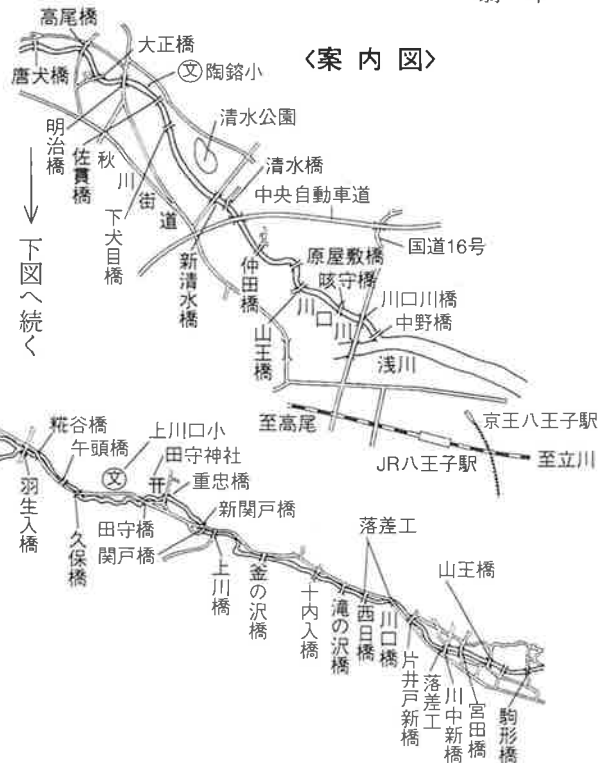
9月1日の浅川清掃デーのポスターをみかけた。八王子市民が一斉に浅川本流をはじめとして全支流の清掃を行う行事である。

十内入橋を過ぎてしばらくゆくと階段護岸となっていて、人が川に近づきやすくなる配慮がなされている。新関戸橋あたりでは鴨が数羽水に遊んでいる。

上川霊園へ向かう道を横切って重忠橋がかかっており、その先に田守神社がある。農村総合整備モデル事業として境内と、背後の林がよく整備され気持ちのよい鎮守の森となっている。梅沢橋付近は川は清流となっており、セキレイが飛び交っていた。

上川口小学校あたりでは川は川底をコンクリートで固めてあり、これまでの自然な感じがにわかには失われている。農水省の補助事業が川近くの地域で行われている掲示があったが関係がないといのだが。栲谷橋、羽生入橋を過ぎると川は流れが細くなり茂みの中に消えて行く。この先はもう川には近づけない、源流はもうすぐなのだ。

翡翠



〈案内図〉

下図へ続く

“多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究”募集

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に329件の研究に対して助成いたしました。

平成9年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方ももちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

(1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

産業構造の変革により多摩川流域においても従来型の産業が減少し、ハイテク産業が上流域に立地するようになり、自然環境に影響を与えております。

また、住生活においては、中流域で人口の過密化があり、最上流域では過疎化が顕著になっています。これ等都市問題を解決すべく今後の土地利用、都市計画、文化活動等視野の広い観点に立った研究が望まれます。

(2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

産業排水は法規制等により減少し、現在は家庭雑排水が汚染の原因の多くを占めているといわれています。

多摩川流域においても河川、地下水の有害金属、発癌性物質、農薬汚染、酸性雨等問題

化しております。これ等が人間を含む生物にどのように影響を与えるのか、その実態、解決策等の調査、研究を望みます。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

毎年夏の水不足は全国各地に深刻な影響を与えております。

雨水による地下水の涵養等が各地で試みられています。

多摩川流域における水循環システムについてあらゆる角度から調査研究をして頂きたいと思えます。

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

建設省は「多自然型川づくり事業」「魚がのぼりやすい川づくり事業」を推進しております。多摩川もモデル河川として親水護岸整備、堰の魚道整備を行っています。

多摩川には年間を通して1600万人もの人々が訪れています。川の自然と人間がいかに共生できるか、環境管理のあり方の研究を含め、課題となっています。

地域住民の視点、研究者の視点で自然環境の保全、回復のあり方についての調査、研究、提言を望みます。

◆公募締切日 平成9年1月16日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1-18-14

(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)3400-9142 (株)とうきゅう環境浄化財団

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

●「植物の生き残り作戦」

編者 井上 健 1996年 (株)平凡社

植物が種の存続のために、さまざまな特性を持つこと、自然との適応性等をブナ、コナラ、カワラノギク、ソバ等特徴ある植物23種について各々研究者が分担して紹介し、絶滅危惧植物の保全についても言及している。

●①「玉川上水に纏う惑」

●②「玉川上水紀元 部検 幻の玉川上水」

著者 恩田政行 ①1995年、②1996年 (株)青山第一出版

①では玉川上水開削の経緯について論じ、また東京都による清流復活事業にも言及している。

②では玉川上水開削の経緯を著した「玉川上水紀元」(1803年八王子千人同心、小嶋文平の提出する“書上”に基づく、佐橋長門守の報告書)を抜粋し、その内容の信憑性について、歴史的背景、地理的条件等参考資料を調べ検証されている。

第2回助成研究ワークショップを終えて

8月7日、財団主催による第2回「助成研究ワークショップ」が行われました。今年のテーマは「マルチメディア時代の環境学習」でした。

昨年、ウインドウズ95が発売され、またインターネットが本格的にブームになり、日本でもいよいよマルチメディア時代が到来した感じがいたします。最近では、児童も家庭用ゲーム機に夢中になり、ゲームをやらないと友達づきあひもできないようで、あれも一種の立派なコンピュータなのですね。教室でも、子供たちは、先入感がないので、すーっとコンピュータに入るようで、授業参観でお母さんに、コンピュータを教えるこどもの姿というのはテレビのCMの世界でもなんでもない、日常の風景です。環境学習の面でも、コンピュータで、自然を代償体験することによって、実際に、ありのままの自然を体験すること無く、自然に感動することがなくなってくることをおそれる人も沢山います。たしかに、環境問題の古典ともいわれる「沈黙の春」の著者、レイチェル・カーソンがなくなられる前に書かれた「センス・オブ・ワンダー」のなかで、こどもにとって大事なものは、自然の神秘さや、不思議さに目をみはる感性を育てることであり、「知る」ということは「感じる」ことの半分も重要でない。ということを書いておられます。しかし、マルチメディアも新しい時代のツールであり、これからの時代を生きてゆく児童にとって、無視することのできない学習の手段でもあります。このような状況のなかで、財団の助成研究のなかで関連する研究を発表し、討論し、提案、意見の交換を行いたいとワークショップを開催いたしました。今回のワークショップでも、学校で環境教育に当たっておられる先生方、大学生、環境学習リーダーの方々など熱心な方の参加が顕著でした。

ワークショップは前半と後半に分かれ、前半が各研究者の報告、後半がいくつかの事例紹介の後、総合討論という形で、とくにワークショップの性格上、聴衆を含めた、全員参加の共同作業を

試みました。報告は次のとおりでした。

報告1 「小中学校の授業における、多摩川環境情報提供システムを活用した環境教育の方法についての研究」— 棚橋 乾

報告2 ①「カードとパソコンによる多摩川原の植物の同定」

②「住民に提供するための多摩川流域の植物写真画像システム作成に関する研究」— 大川ち津る

報告3 「河川の学習機能に関する研究—多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケース・スタディとして—」

— 松下希一

コーディネーターは芳村、コメンテーターは麗澤大学の宮川公男教授にお願いしました。

パソコン プロジェクター、OHPなどを駆使して各研究者はそれぞれ30分にわたりわかりやすく情熱をこめて報告を行いました。

後半の総合討論に入り、最初に報告者間での質疑応答、感想の交換があり、研究者としての立場の違いを越えた、新しい意見の交換がみられました。「多摩川ふれあい教室」での児童のマルチメディアに対する反応について鈴木聖子さんから、昨年のパネリスト大竹千代子さんからはインターネットによる、地球規模の河川環境教育ネットワーク「GREEN」についての紹介がそれぞれありました。

聴衆の方々からは、できるだけ多くの方の参加を図るため、質問票をあらかじめ提出いただく方法をとりました。各報告者に対し、それぞれ3人～4人の質問があり、内容の濃い、いろいろな多方面にわたる意見の交流が見られました。最後に宮川先生から、各報告者への丁寧なコメントがあり、全体についても示唆ある指摘があった。時間が30分以上超過したにもかかわらず、途中で帰られる方もほとんどおられず、真剣で充実したワークショップが無事終了しました。

芳 村 重 徳

- ・発行日 平成8年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125